EICA Journal of EICA Essay エッセイ

小貝川氾濫から学んだこと

Valuable Experience of Kokaigawa Flood

早稲田　邦　夫
Kunio Waseda

EICA 名誉会員

1986年8月の某日朝，「今日は快晴だね。台風一過で，空気もきれいだし，昨日の暴風雨がうそのようだ。」と妻と会話し，玄関先にいた隣の奥様にも挨拶を交わし，軽やかに会社へ出勤した。会社に着いたら妻から電話があり，すぐ帰宅して欲しいと言われた。私が出勤した後，隣の奥様から，小貝川の河川水位が上昇し続け，地元消防団が土手近くに集まっていて土嚢つくりを始めていると教えてもらった。地元の男性達も手伝いに行っておられるようだ。会社には事情を説明し，急いで帰宅した。まずは畳，襖，など一階の動かせるモノは二階へ避難させた。それから小貝川の土手に行ってみた。水位は明らかに高くなっていて，皆，川面を心配そうに見ていた。よくみると土手の表法面に棒を縦列に数本立てて，水面上昇を観察していた。水位が目に見えて上昇していくのが分かった。このままだと数時間後に溢れるかなという不安を持ちながら，一方で，土手裏法面側の通水部分への土嚢積み上げ作業は続いた。誰かが，水位上昇が止まったと言った。しばらくして，水位が下がり始めた。上流側で堤防が決壊したという情報が伝わってきた。ひとまずこの地区の土手決壊，浸水は大丈夫と言われた。

台風が去った後にも水害はやってくるのだ。雨が止んで12時間後の快晴の空の下での小貝川氾濫の出来事は教訓となった。我が家は故あって，同じ地区内で転居した。

2015年9月　鬼怒川上流側の線状降水帯による大雨により，常総市で大きな被害が出た。そのときは，近隣在住の娘より，早く娘宅へ避難するように指示がきた。怖いものみたさで，鬼怒川の堤防まで見に行ってから娘宅へ自主避難した。そのとき娘宅へ行くルートについては何も考えずに移動した。息子も戻って来て，被災した友達の家に手伝いに行った。あとで気付いたのは，このとき，騒いでいたのは我が家だけだったかも知れない。道端で会話している人は皆無であった。

その後，新聞・テレビ報道を通して，日頃からハザードマップを良く見て避難場所を確認・避難準備しておくよう注意があったので，市のハザードマップを調べた。よくみると点線で囲まれた行政区分の内側には浸水レベル毎の色付けがされていた。ただ，行政区分外の隣接市側は白地図だった。隣接地帯の住民は域外へ避難するという判断は出来ないなと思った。白地図事象はこの地域だけではなかった。他のハザードマップを覗いてみると，アクセスした都道府県都市町村のハザードマップは同様に行政区域外は白地図だった。中には区毎に細分割されていた。広域連携，広域避難という言葉とは程遠い状況のように思う。国道が避難通路のように矢印が描かれているが，域外に行ったところは水没しているかも知れない。自分の身，家族は自分達で守らなくてはならない。たまたま外出先かも知れない。避難場所を決めていても自分の居場所から避難場所までの道程は大丈夫なのか，あらゆるケースを自ら学習しておく必要がある。特に行政区域外への避難は複数のハザードマップをみて道程を決めておく必要がある。まずは我が家から娘宅への道程を複数のハザードマップで確認したところ，日頃通っている旧道ルートは浸水箇所があり，危険と分かった。

最近，国交省国土地理院より『重ねるハザードマップ』サービスが公開された。日本国中シームレスに確認出来るので自分の位置の危険度が分かるし，どの方向に逃げるか判断する材料になる。如何に危険と隣合せに住んでいるかがよく分かる。但し避難場所の表示はないのは残念である。我が家から娘宅の道程を調べたところ，今までのハザードマップにはない浸水箇所表示があった。0.5 m以下ではあるが国道の一部が冠水する表示であった。多分，最新データに基づく情報なのだ。情報混乱回避のために，国と市町村とのデータの整合を望むところである。

小貝川氾濫などの経験を経て，災害から身を守る意識だけは高くなった。自分の位置の高度，方位がすぐ分かるように，登山もしないのに登山用腕時計を購入して，皆からからかわれている。気候変動により災害の危険度の高まっている日本において，人口増・経済の高度成長時代に構築した都市には浸水する役所・学校・病院・駅・避難所等があることを直視し，人口減少・超高齢社会時代に沿った都市再生をすべきである。当学会の環境計測制御の研究開発技術で質の高いインフラ再生に貢献していくことを望む。